

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



特別号
2013 年 3 月

目次

村瀬くれな	春霞 1
	遠くの雷 2
	雨天 4
伊東友乃	春の人魚 5
	鳥 6
	詩 七篇 ～被災地の景色のなかで～ 8
関根全宏	今はもうない 11
	長雨 12
	道連れ 13
	人知れぬ 14
高間かさね	ぼくの は 南国へいく 15
	ミドリ 16
	二十四、そして多くの瞳 17
栗山佳織	妹 18
	風呂場 20
当津宏昭	初夏 22
	告別式 23
	砕けてものを思ふころかな 24
戸張雅登	マデロン 25
	墜落 26
	金環日食の日に私たちの三角関係を詠う 27
	ケーキ 28
朝倉さやか	つちのなか 29
熊谷めぐみ	寄りそって生きていく 30
渡辺信二	オルガ——あるヴァイオリニストのために 31
	仔羊のごとく 虎のごとく——ブレイクにならって 32

表紙原画

ピカソのオルガ：『安楽椅子のオルガ(1917)』へのオマージュ、鈴木順三
マティスのオルガ：『肘掛け椅子の女(1916)』へのオマージュ、鈴木順三

春霞

村瀬くれな

花曇りに助けられたいのちが

またひとつ

若者が狂っているふりをする

ことばを衣装に着飾って

またひとつ

自らのことをくるんだまま

感性が死ぬのも気づかず

またひとつ

混乱のなか子供達は笑う

それでも笑う

またひとつ

戦い方を教わらないで

笑ったまま砂嵐に消える

遠くの雷

村瀬くれな

「今日の東京上空の大気は不安定です」

横切る飛行機の羽根が呼吸と空気をかき混ぜて

（僕らのため息は透明で見えない）

グレーの雲は低くたれ込めている

春は人を殺します

でも

夏でも冬でも秋にさえもその力はない

春が人を殺します

そして今度はどこに行くのか

飛行機の羽根が世界をかき混ぜる

これから何人殺されるのか誰にもわからない

僕らには聞こえない遠くの雷
薄暗くぐわんと歪んだ大気

春が人を殺します

雨天

僕がいなくなっても続く世界を
僕は決して見ることができない

季節外れのヒーターの前
膝を抱え食べるヨーグルト
味がしない
プラスチックのスプーン

髪の毛の雫は黙ったまま
蒸発していなくなる
重さはいつかなくなってしまう

肩にかかるバスタオルの
何か言いたそうな湿度
世界がこんなに簡単に
壊れてしまう音をいま僕は聞いた

地球の春はこの雨と一緒に
そろそろ終わりを告げる

村瀬くれな

春の人魚

伊東友乃

たくさんさんの涙が
シーツのうえにこぼれた
うすぐらい春の朝
わたしの耳は
こちよい雨の音にくすぐられ
やわらかく さきつぽから
溶けだしていく
わたしの子宮は
かたかたとガラスコップが
揺れるようなリズムで
すこしずつ ふくらんで
あたたかな血を あふれさす
そうして 一つのまにか
できた小さな海
わたしの肢体は 誘われるまま
たゆたい ほどけながら
沈んで
さよならの言葉たちだけが
泡ぶくになる

鳥

伊東友乃

詩の なかに
一羽の 鳥を おいてみる

そのやわらかな曖昧さと
軽やかさゆえ

ぶつかりつづけていた言葉たちは
新鮮な 空気を吸いこみ
息をふきかえし
意味をのばしていく

羽を 膨らませながら
定義づけのまえに形を
変えようとする 鳥 そのもののように

鳥の おかれた詩は
どこまでも

ゆるやかにのびていつて

その 先の

行きつく 終わりを

わたしたち 人は 見届けられない

詩 七篇 く被災地の景色のなかでく

伊東友乃

一.

私の重心が
からからとまわりはじめます
風なんぞ ふいていなくとも
からからと

二.

きつと
世界の終わりの
空の色は
冬の朝のような
春の夕暮れのような
にぶい銀色をしているのでしよう

三.

さくらの美しさのむこうに
隠れているのは

さびしい空
途方もない何かが
落ちたあと

隠れんぼうして 遊んでいた
あの子らは もういない

四・

このやわらかい土のしたには
ふかく悲しみが 眠っていて
ひとかきすれば
こんこんと湧いてくる
あたたかく そして すこおし
潮の匂いがする

五・

役たたずの 道標のまえで
白い風が ぴたりと やみ
このさきの 世界に
近づくことも
遠ざかることも
できないまま
私だけが 置き去りに

六・

太陽のひかりが
さんと降っているとき
生きているものを 見かけると
ほっとするのは
ひかりのなか
生きている私の
存在も 分かるからです

七・

凍ってしまった 悲しみは
ひと足はやい 春に
溶かされまいとして
たおれた電柱のしたで
ひっそりと

今はもうない

関根全宏

水の音と虫の音が
遠くから聞こえていた
残りわずかな火が
おわりに向かって燃えていた

星が点々としていた
私はその粒より小さかった
だからもはや手のひらに
祈りなど必要なかった

身を起こすと
赤い炭が消えてなくなり
暗い闇が降りていた
水を一口 小さな異物が胃に落ちる

そして私は瞼を閉じる
下弦の月がいつまでも白く浮かんでいた

長雨

関根全宏

おまえが憎い

あのワイパーの擦れる音を

幼い頃にいつも聞いていた

それは埋まらない距離を刻んでいた

あの音から その距離から

今も出ることができない

静まりかえったこの心は

淋しさが賑わう墓場

おれがずっと待っているのは

もう一人の淋しい女

いつになれば現れるのかと顔を出すと

雨粒が つ——つと

首筋を伝って

凍みた

道連れ

関根全宏

空 曇り

岩 渴き

点々と した

木々 緑

小さな人影が

眺めのよい場所に行きつく

遠く灰色の空に

黒い点が吸い込まれていく

夕刻 おれの 道連れの

足音と息遣いが消えていた

いや 遠い昔に消えていたのを

その時思い出しただけだった

あの人影も消えていた

おれは独り足跡のない道を進んでいった

ひと知れぬ

関根全宏

ひと知れぬ涙が

お前の背中を震わせる

ひと知れぬ思いが

お前の口許を歪ませる

それでもなほ

闇夜に浮かぶ月の明かりが

稲穂の影をほのかに揺らす

駅舎にはまた孤独者がひとり

姿を見せては消えてゆく

あゝ　ひと知れぬ思いを胸に

ひとびとはひとり亡骸となる

闇夜に聞こえるかの遠き汽笛が

またひとつの死を告げる

それもまたひと知れぬ

ぼくのは 南国へいく

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

ミドリ

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

二十四、そして多くの瞳

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

妹

栗山佳織

誘われたのに行かなかったのは
今日じゃなくてもいい と思ったからだ

この町を覆っていた雲の間から
久しぶりに二月の陽光が

窓辺のゼラニウムの葉を照らし

冷え切った床に短い影を落とした

「スケートに行こうよ」と言う彼女の顔も見ないまま

わたしは暖かな布団の中で

鼻先と指先だけ冷たくして本を読んでいた

湖にスケートの刃跡がいくつもついている

途絶えた先でも

まだ続いているように見えた

どこまでも続いて

わたしのところへは戻って来ない

春になって

彼女の息が 湖の底から上がってきても
わたしは彼女を失い続ける

風呂場

栗山佳織

祖母がだんだん

遠くへいつているのがわかる

二月の終わり

その日が来るのを待ちかまえまいと

祖父も叔母も

いままでと同じ一日を過ごしている

ある晩

一人でいけないトイレへいこうとして
間に合わず

夜中の風呂場で

祖父と叔母の手から

あたたかな湯が

祖母の冷たい足元を

汚物といつしよに流れていく

風呂場からもれる

しろい湯気に
堪えていた涙がまじり
静まりかえった家の中を漂うと
再び眠りにつく祖母の目尻を
あかく濡らす

初夏

当津宏昭

春は通り過ぎて行った

冷蔵庫から出した桜桃に
一粒一粒切り込みを入れれば
指先を覆う快い冷たさ
丁寧に種を抜きながら
「今年も旬がやってきた」
キッチンで一人感じ入る

赤く色づいた桜桃を
舌と上あごですり潰せば
広がる甘味、続いて酸味
種のない果実は寂しいが
「今年も再び味わえた」
ベッドで一人感じ入る

こうして夏がやって来る

告別式

当津宏昭

体は宝だ 同胞（はらから）だ

この世に生を受けてから 今日という日に至るまで
勝手気ままな魂を 水も漏らさず包み収めた
大切な相棒である

そのかけがえの無さを省みず
血反吐を吐くまで酒を飲み
腹十二分まで貪り食い
昼も夜もなく遊び歩いては
この肉体を酷使した

それでも 時に悲鳴を挙げながら
生涯を共にした我が体よ
世に二つとない永遠の友よ
今更遅いとは知りつつも
参列者に混じり 私も合掌を許されるだろうか

体は空だ 亡骸だ
今じゃすつかりもぬけの殻だ

砕けてものを思ふころかな

当津宏昭

千年以上の大昔

海辺に佇む人一人

儚い願いを胸に抱いて
沖を見つめて物思い

波がうねって岩を打つ

粉々になった水の破片が

白く光って弾け飛び

黒々とした水面に消える

繰り返される情景が

その人に歌を作らせた

願いは波の如くに砕け散り

嘆きの歌だけ残された

今なお波は押し寄せる

飽きることなく岩を打つ

マデロン

戸張雅登

目覚めると　そこに少女がいた
黙って立っている

微笑みかけても　俯き加減で
目を合わせてはくれない

何を言っても返答はなくて
突然踵をかえして駆け出した
彼女の影を追って
海に面した市場に迷い込む

軒を連ねる粗末な屋台
鋭い目つきの男たちがこちらを見ている
少年が先も見えない荷車を押して
店先には少女が寝ていた　ゴミとゴミの間

彼女を起すことなく市場を去る
目指したのは丘の上　神の家を建てるために

墜落

戸張雅登

海に落ちたミニクーパー
沈むわたし 広がる闇
きしむフロントガラス
欲しいのは静寂

触れられたくない
聞きたくない
見られたくない
一人眠りにつきたくて

走馬灯もトンネルの向こうの光も嘘
あいつの顔も思い出せない
もうすべては終わったこと
結婚を夢みたわたしは幼かった

今は ただ 寒いだけで
わたしは誰にも知られず消えていく

金環日食の日に私たちの三角関係を詠う

戸張雅登

彼はいつも先を行く　私が進んだ分だけ前へ進む
彼が見つめる先にいるのは　明るい笑顔の元気な女
地味で小さな私は　彼の目には入らない
だから選んだ　捨て身のアプローチ　彼をめぐけて

一直線　逸らしたかった　彼女への視線　変えたかった
二人の距離　勢い余ってぶつかった　そしてえぐる　彼の心
飛び散った破片をかき集め　私は新たになる　あなたの傍で
若い二人についた火は勢い増して　煮えたぎるマグマ
暗い世界で燃える二つの星　私のなかで生きる　あなた

それから二人は大人になった　あなたの表情は和らいで
碧い瞳は輝き放つ　黒いシミが目立つ私に　優しい眼差し
離れたくない私は　あなたを軸に　回る

けれどあなたの中心は　やっぱりあの女　いつまでも元気な
だから私は二人の間に割って入って　隠す　彼女の笑顔を

ケーキ

戸張雅登

ケーキに入る刃 照れる男に微笑む女
拍手 歓声 笑顔・・・見飽きた光景

参列者の中に 心から喜ぶ者は幾人いるのか
焦燥感を募らせるもの 相手を探しに来たもの
私の笑顔は自分への蔑み

白いショートケーキは食べるものではなく
あいつの顔に投げつけて 欺瞞に満ちた表情を
塗り潰すもの

私が好きなのは 黒いチョコレートケーキ
それを苦めのコーヒーで飲み下し
一人 寢床に就きたい

ここはあまりに明るくて 身が縮む
早く暗がりへ 会場を出ないと
二人が私の表情に気付く前に

つちのなか

朝倉さやか

あしもとで おもいおもいに からだをのばす たんぽぽに つくし
すこしはずかしそうな すみれ
おおぜいで たのしげな おおいぬのふぐり
つつましく あでやかな ほとけのざに からすのえんどう
ふわふわに あたたまった しろつめくさに とりかこむ くろーばー
みつばちの はおとに めをさました れんげ
もんしろちようが むかったさを うめつくす なのはな

そのむこう
はらっぱに いっぱんだけたつ
なもしらぬ ほそいき

あのきのねもとで
ちいさなことが ねむっています
つちのなか
ちいさな じゅうしまつが――

寄りそつて生きていく

熊谷めぐみ

こういう時は詩を書くべきだ
こういう時は書かないべきだ
論争渦まく時だとしても
詩に寄りそつて生きていく

私はよく詩を忘れるし
詩はいつも私を忘れている
人生を変えるような出来事が起きても
詩以外のものに託すことも多い

それでも積み上げてきた日常を
他の誰より率直に映し出す

なれ合いを嫌う幼馴染のように
苦笑いを繰り返しながら
これからもきつと
詩に寄りそつて生きていく

オルガ

——あるヴァイオリニストのために

渡辺信二

音楽を諦めて良かった
あなたが欲しかったから
あの時 弦が切れたのは
偶然でも嫉妬でもありません
憎みたいのに憎めず
ただ あなたの子どもを
生みたかったです

思うがままに振る舞え
ほんとうの海がもう ないとしても
海辺で 波音に立ち向かい
悲しければ悲しいと歌うが良い
美が沈黙から生まれて沈黙へ戻るとしても
人の戦き 人の呻きを
おまえの弓で掻き鳴らすが良い

仔羊のごとく 虎のごとく

——ブレイクにならって

渡辺信二

燃料体よ！ 燃料体！ あかあかと燃え

闇くろぐろのフクシマの海辺に

どんな不死の手が おまえの怖ろしい

3D対称形の弾道体を作り得たのか？

どこの海 どこの空で おまえの目がらんらんと

あまがける神の羽を捉え どんなおそろしい手が

その火をあえて驚掴みにしたのか？ どの手が

死を齎す恐怖をむんずと掴んだのか？

星星が光の槍を投げ 空を涙で潤すとき

神は 創られたおまえを見て 微笑まれたか？

仔羊や虎を創った神が 実は おまえを創られたのか？

燃料体よ！ 燃料体！ 闇のフクシマに

あかあかと燃え どんな不死の手 どんな目が

おまえの怖ろしい永遠をあえて創ったのか？



詩誌『立彩』特別号 2013年3月31日 頒価800円

編集発行「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス学院大学文学部英文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311